

死を予感しながら闘病する血液疾患患者の 思いの表出を支える看護実践上の指針

馬原由梨（応用看護学）

【キーワード】 血液疾患患者、治療の限界、死の予感、思いの表出、実践上の指針

本研究の目的は、治療の限界を告げられたり、回復の兆しがみえず死を予感しながら闘病する血液疾患患者の思いの表出を支える看護実践上の指針を得ることである。

研究対象は、通常業務のなかで対象に関わり、思いが表出されたと思われる場面における自己の看護者としての認識と表現である。

研究方法は、対象の思いが表出されたと思われる4事例5場面を選定し、〈対象の事実〉〈看護者の認識（瞬時の認識）（想起した認識）〉〈看護者の表現〉の項目に分けて研究素材を作成した。研究素材を精読し、対象の思いが表出された局面毎に分け、現象を残して関わりの意味を取り出した。次に、看護過程展開モデル図に沿って看護者が何に着目し、看護上の問題をどう描き、立場の変換をどのように行いどう感じ取っているのかを読み取り、〈看護者の認識と表現の特徴〉を抽出した。そこから共通性と相違性を検討し、以下のような看護実践上の指針を得た。

1. 実体面の苦痛な症状に関心を向け、睡眠など生活に支障はないかと推測し、関わりによって実体面を整えながら、思いを表出しやすいよう機会をつくる
2. 生命力の幅が小さくなっている状況の中でも対象の持つ生命力を、生きる力、人と関わる力、生活する力、支える力の視点でみつめ、発揮できる力があることを対象がイメージできるように伝える
3. 対象が過去の経験を表現したとき、対象の事実を一般的な人間のライフサイクルと重ね合わせて描き、その人なりの感じ方や考え方を追体験し共感の言葉を添え、さらに思いの表出を促す

4. 治療の限界を知らされている対象に迷いや葛藤がないかとの視点を持って関わる
5. 本人の思いと支える人の思いとにズレはないかとの視点を持って関わる
6. 対象から自身の死について語られたとき、その思いをさえぎらずに向き合い、生きることを支えたいという看護者の思いを伝える
7. 対象が生きてきた過程を語る言葉から、その人の生きてきた軌跡に目を向け、生活を描き感じたことを伝える